

北海道価値創造パートナーシップ会議 in 岩見沢  
～新たな北海道総合開発計画に向けて～

日時 平成27年5月15日(金) 14:00~16:00

場所 岩見沢市自治体ネットワークセンター 4階 マルチメディアホール

I 議事

1. 開会
2. 出席者紹介
3. 国土交通省北海道局説明  
・新たな北海道総合開発計画に向けて
4. 出席者による意見発表  
【テーマ『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けて環境整備、対流促進』(サブテーマ) 定住環境の整備・対流の促進】  
①ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介  
②日頃の活動を踏まえてご意見
5. 意見交換
6. 閉会

II 出席者(順不同・敬称略)

山口 登美男	国土交通省	大臣官房審議官
桜田 昌之	国土交通省	北海道局 参事官
竹原 勇一	国土交通省	北海道局 企画調整官
今日出人	国土交通省	北海道開発局 開発監理部 次長
石田 悦一	国土交通省	北海道開発局 札幌開発建設部長
小林 力	国土交通省	北海道開発局 開発監理部 開発計画課長
石渡 杏奈	いわみざわ公園バラ園	バラ管理・色彩館サブマネージャー
奥田 知靖	国立大学法人北海道教育大学岩見沢校教育学部	准教授
小西 泰子	豊正FAM協議会ふれあい室	室長
坂本 純科	NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト	理事長
谷川 良一	NPO法人グラウンドワーク西神楽	理事
横井 清	移住推進会議「移る夢深川」	会長

### Ⅲ 議事

#### 1. 開会

小林：

それではただいまから、「北海道価値創造パートナーシップ会議 in 岩見沢～新たな北海道総合開発計画に向けて～」を開会したいと思います。本日は皆様、お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。会議の進行を担当いたします、北海道開発局の小林と申します。よろしく願いいたします。座って進めさせていただきます。この会議は、北海道内各地域の課題解決や、活性化に日ごろから活躍されている方々のご意見等をお伺いし、新たな北海道総合開発計画の立案に生かすとともに、関係者双方の協力関係の構築、促進をはかることを目的とし開催させていただいております。本日の会議はマスコミの方々を含め、一般の方々に傍聴いただいております。本日の配布資料は資料 1～8 までとなっております。

本日の議事録及び資料につきましては、後日、国土交通省ホームページに掲載させていただきますのでご承知おきください。それでは、初めに国土交通省を代表しまして、山口大臣官房審議官が一言ご挨拶を申し上げます。

山口：

北海道局審議官の山口でございます。本日は皆様、何かとご多用の折にもかかわらず、「北海道価値創造パートナーシップ会議」に参加いただきましてありがとうございます。また、平素より国土交通行政の推進につきまして、多大なるご支援とご協力をいただきまして、この場を借りて厚くお礼申し上げます。さて、本日の会議でございますが、「新たな北海道総合開発計画に向けて」というタイトルでございます。北海道総合開発計画につきましては、北海道の豊富な資源、特性を生かし、そのときどきの国の課題解決に寄与することを目的に定める計画でございまして、昭和 27 年から、現在まで 7 期にわたる計画を進めているところでございます。現在進めている 7 期計画につきましては、平成 20 年から 29 年までの計画でございますが、昨今の人口減少、急速な高齢化という時代特有の変化や、農林水産業、農村漁村の振興など、全国で 2 千万人の目標に向けたインバウンド観光の推進、国土強靱化基本計画を踏まえまして、地域の新たな取組等、政策課題の変化に的確に対応するため、計画期間をまたぐ来年の春ごろの取りまとめを目指し、新しい計画の策定について、国土審議会の北海道開発分科会で、審議を進めているところでございます。新しい計画期間であります、来たるべき 10 年につきましては、地域にとってまさに生き残りをかけた非常に重要な 10 年であります。それとともに、北海道全体といたしましては、世界水準の価値創造空間、太田大臣の言葉をお借りすれば、「世界の北海道の形成」に向けて、前に踏み出す重要な期間であります。その計画の策定にあたりましては、中央での審議に合わせまして、地方

の第一線でご活躍の皆様方のご意見をしっかりとうかがってそれを計画に反映させるということで、全道 5 都市で「北海道価値創造パートナーシップ会議」開催させていただいているところでございます。これまでに札幌と苫小牧で開催しまして、本日が 3 都市目の開催になります。本日は「定住環境の整備、対流の促進」というサブテーマを設けさせていただいております。地方の生き残りにとっては非常に重要なテーマでございます。本日は日ごろから地域の課題に向き合って、活性化に積極的に取り組んでいただいている皆様方のご意見をうかがって、新しい計画の検討に活かしてまいりたいと考えております。最後になりますが、積極的な意見交換をお願いしまして、簡単ではございますが開催にあたりましての挨拶とさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

## 2. 出席者紹介

小林：

報道関係者の方々、傍聴の皆様のカメラ撮影はここまでとさせていただきます。続きまして、本日も出席の皆様をご紹介申し上げます。石渡杏奈様。

石渡：

よろしく願いいたします。

小林：

奥田知靖様。

奥田：

奥田と申します、よろしく願いいたします。

小林：

小西泰子様。

小西：

小西と申します、よろしく願いいたします。

小林：

坂本純科様。

坂本：

よろしく願いいたします。

小林：  
谷川良一様。

谷川：  
よろしく願いいたします。

小林：  
横井清様。

横井：  
よろしく願いいたします。

小林：  
国土交通省の出席者を紹介いたします。山口国土交通大臣官房審議官。

山口：  
よろしく願いいたします。

小林：  
桜田国土交通省北海道局参事官。

桜田：  
よろしく願いいたします。

小林：  
竹原国土交通省北海道局企画調整官。

竹原：  
よろしく願いいたします。

小林：  
今国土交通省北海道開発局開発監理部次長。

今：  
よろしく願いいたします。

小林：

石田北海道開発局札幌開発建設部長。

石田：

よろしく願いいたします。

### 3. 国土交通省北海道局説明 新たな北海道総合開発計画に向けて

小林：

それでは、さっそく議事に入らせていただきたいと思います。まず最初に国土交通省北海道局から、新たな北海道総合開発計画の策定に向けてについて説明いたします。

桜田：

それでは少しのお時間をお借りしまして、資料 2 に基づきまして、北海道総合開発計画の改訂作業中ですが、状況についてご説明申し上げます。まず、1 ページですが、左上のほうに新たな計画検討の背景とございます。ひとつは、時代の潮流の変化というものがございまして、ご承知のとおり、人口急減・超高齢化社会が進んできております。二つ目といたしまして、グローバル化の更なる進展と国際環境の変化があります。三つ目は大規模災害等の切迫とございます。これらを踏まえまして、新たな計画の基本的な考え方といたしまして、(2)であります。認識といたしましては、北海道総合開発計画の 10 年というのは、地域の生き残りをかけた重要な 10 年であるということと、北海道新幹線の開業をはじめといたしまして、地域の飛躍の契機をいろいろと含んだ期間であります。これを踏まえ長期にわたるビジョンといたしまして 2050 年を見据え、世界水準の価値創造空間の形成。これは先ほどの審議官のお話にもございましたように、私どもの大臣からは堅い表現だと言われておりまして、大臣は「世界の北海道を目指して」というようなことをおっしゃっていますが同じような意味でお取りいただければと思います。このビジョンを踏まえ、施策のフレームワークといたしましては、(3)に書いているとおりでございまして、まずは地域の維持、二つ目は多様な人材の確保・対流の促進であります。三つ目は、人が輝く地域社会ということで、「世界水準の価値創造空間」の形成に向けて環境整備・対流促進をするということになります。同じような青色で括ってありまして、(1)の「時代の潮流」と連動した色使いでございます。それから、四番目といたしましては「しごと」を創り「外貨」を稼ぐ産業の振興。五つ目に強靱な国土というテーマを考えていくわけでございます。政策を進めるにあたってのポイントとしましては、人口が減っているということで、人こそが来たるべき時代の北海道の資源であり、人材育成・活用を重点的に考えていかなければいけないという視点であります。もう一つは、民間の方々を含めまして主体的な参画を促し、関係者が連携す

るための産学官のプラットフォームを展開していくという考えであります。補足として2ページであります。人口減少と高齢化でございます。山なりのグラフがございますが、赤が北海道を示し、青が全国であります。北海道は平成9年に570万人弱というピークがございます。以降減少が続いてきております。全国は平成20年にピークを迎え徐々に減ってきているということで、北海道は全国に10年先駆けて人口減少が進んでいるという状況でございます。高齢化の割合につきましても、赤が北海道で青が全国でございますが、右肩上がりに高齢化が進んでいるという状況がおわかりになるかと思えます。3ページは5年おき、10年おきの国勢調査の際の、調査時点におきまして、5年前の在住地を比較することにより人口の転入・転出を比べたものであります。90年、2000年、2010年の三回の平均値をとっておりますが、プラスになっているものはピンク色、全道で札幌だけですが、流入が超過している。それ以外の地域は全て、人口流出の大きいところほど強い色になっておりますが、たとえば札幌の右上に南空知がありますが、4%程度の人口流出。どこに行っているかという札幌。空知であれば6%弱の人口流出。これも札幌の方に出て行っている。北空知であれば4%程度の人口流出。これらがずっと続いていることにより地域の活力がどんどん減ってくるのではないかと、そういう問題意識でございます。したがって、本日ご議論いただくテーマの、定住環境の整備、対流の促進といった観点で、幅広いご意見を賜ればと思えます。以上ご説明させていただきました。本日はよろしくお願いいたします。

#### 4. 出席者による意見発表【テーマ『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けて環境整備、対流促進』(サブテーマ) 定住環境の整備・対流の促進】

##### ①ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介

小林：

それでは、引き続きまして出席者の意見発表に移らせていただきます。ご出席の皆様から、各地域での日ごろのご活動や取り組みの概要などについて、また式次第に書きましたように、②の日ごろの活動を踏まえたご意見など大きく二つのパートに分けさせていただいております。最初に、①ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介。活動について簡単にご説明いただければと思えます。目安としてはお一人三分ほどでお願いしたいと思えます。最初は石渡様から。次の②番は逆に回らせていただきます。そのあと意見交換という形にさせていただきます。

石渡：

石渡です、よろしくお願いいたします。私は岩見沢公園バラ園でバラの管理を主に担当しております。普段は外でバラの世話をしているのですが、岩見沢公園バラ園は指定管理で民間企業が委託を受けてやっているのですが、岩見沢市の中でも大きな観光資源として、

2013年にリニューアルオープンしたばかりです。それだけ岩見沢市からの期待も大きくかけていただいている施設です。バラ園の規模としては、北海道で一番大きいバラ園で、品種数も多いということになっているが、まだまだ課題としては、周知されていないことが大きな問題となっています。活動として新しく始まっているのが、環境への配慮ということで、無農薬栽培への挑戦ということと、昨年から本格的に始まっているのがリサイクル事業ということで、市内公園から出ているもの、街路樹の剪定枝などのリサイクル、園内で出た植物残渣のリサイクルなどを行っています。時代に即して誰でも安全安心で来ていただくために行っているのですが、そういった取り組みもまだ知られていないということで、今年からまた少し力入れて宣伝なども始めてはいるのですが、まだまだといったところです。そこで、岩見沢市だけ見るとそういう形だが、道内全道で見たところでも、ガーデンの観光資源が大きくなってきておりまして、特にガーデン街道などはすごく注目される観光ルートとして、旅行会社のツアーなども今大きく動いているところではあります。岩見沢市は、空港から旭川へ向かう12号線ですとか、2, 3, 4号線などの通過地点として通過されてしまう町ということで、なかなか立ち止まってもらえないというこれまでの問題がありますので、今後、そういったところでも、ぜひガーデン街道に組み込んでいただくことや、周辺にもたくさんガーデンがございますので、ネットワークを結んで、大きく北海道としての観光というかたちで打ち出していければ、より活性化していけるのではないかと考えています。

奥田：

北海道教育大学の奥田と申します。よろしくお願ひいたします。大学で取り組んでいる内容としまして、私が主に関わっているものとして2点ご紹介したいと思います。一つ目の取り組みは、地域の子供たち、学校等が終わった後に子供たちを集めて、遊びのようなことをたくさんやらせましょうと。何かを一方向的に教えるのではなく、子供たちが自由な発想でいろいろなことを考えて。ただ、こちらとしては狙いを持ってその遊びをやらせるということで、子供たちに、教育以外のことを、学校教育外で進めてほしい、という活動が一つあります。

もう一点は、障がい者のスポーツということで、障がい者のスポーツ環境は非常に日本全国で弱いので、そこをカバーしたいということでして、理念、背景としましては福祉の充実であったり、障がいというものに対する考え方ですね。つまり、車いすのユーザーの方が我々と同じように歩道を移動していれば、誰が見ても障がい者というふうに思われるかもしれませんが、例えば、車に乗っているとおそらく障がい者だとわかる人は誰もいないだろう、と。つまりルールが障がいというものを作っている。環境が変われば障がい者になる、と。そういうことですので、背景として、オリンピック・パラリンピックの合宿を岩見沢でやっていきたいことに関しましては、そういう障がいに関する考え方を進めていきたいということがありまして、そのために障がい者のスポーツの充実という活動もやっております。内容紹介ということでこの二点をお話しさせていただければと思います。

小西：

岩見沢北村で農業をしております、株式会社小西ファームの小西と申します。今年の作付面積ですが、水田が 23 ヘクタール、小麦が 17 ヘクタール、大豆 5 ヘクタール、直売用野菜、その他で、全面積で 46 ヘクタールの典型的な空知輪作型の農業を営んでおります。平成元年より無人の直売所を自宅前にて開設後、平成 11 年より小西ファームの経営の中で、生産者と消費者、都市と農村の交流活動を目標に活動を続けてまいりました。平成 17 年より、生産者と消費者、また異業種との交流を模索した、料理講習会、交流会、栽培講習会、講演会、フットパス交流会、落花生祭り、落花生オーナー制度など、4 年前より、豊正 FAM 協議会「ふれあい室」の活動に参画することにより、地域ぐるみの交流活動を展開できるようになりました。市役所、学校、農協など、公的施設の合併や、遊水地計画による移動や市街地への移動に伴う過疎化、限界集落の危機を感じているところです。現在は、ふれあい室の目的である、直売・加工・購入の研修を地域住民とともに活動する傍ら、地域住民の集いや交流を第一の目標に掲げ、農業の中でできることを最大限に生かし、心身に障がいを持つ方等の福祉や医療など幅広い分野での活動を模索し、先月 4 月、JA 岩見沢大富支所資材店舗跡地を利用して、豊正 FAM 協議会の有志が中心となり、他地域に広く呼びかけ活動する、北の大地マルシェ準備委員会が発足されました。そして、北の大地マルシェ代表として就任したところです。本年度は 7 月末より直売活動を週 1 でプレオープン、今年度は 9 月より加工事業が開始され、塩茹で落花生等が加工される予定でございます。来年度より長年培ってきました、ふる里ふれあい店直売活動を閉店し、北の大地マルシェ直売事業を開始する予定しております。来年度以降につきましてはカフェ事業に展開するという予定がございます。今後には皆様のご協力をお願いしまして、進めていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

坂本：

余市町でエコカレッジという事業に取り組んでおります、NPO 法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトです。農的暮らしや、農村の資源や課題を素材とした学びのプログラムを各種実施しているところです。必ずしも農業の研修ではございません。資料の中にも織り込んでいる、リーフレットに通年のプログラムの内容を紹介しているのですが、再生エネルギーやエコ建築など、ソーシャル・ビジネスで地域活性のような、ソーシャルデザイン系のテーマにも取り組んでいます。私たち自身が果樹園を営んでいて、メンバーも地元の農家さんが多いので、持続可能な食と農という視点での事業が今一番力を入れているところです。都市からやって来る人たちが学ぶことで、その人たちが必ずしも就農者になるという結果がすぐ出るわけではないが、農業を支えていく地域を活性化させる人材として、継続的に関わる人たちが増えているところです。モデルとなっているのがヨーロッパのエコビレッジなのですが、こちらも資料に書かせてもらっていますが、基本的には暮らしの場、地

球のコミュニティがベースになっていますが、世界中に今、1万5千か所以上あると言われていますが、中には年間に1万人2万人、多いところだと5万人近い訪問者が来て、滞在しながら、いろいろなテーマで学びを重ねていく。それが地方再生のプログラムとして北海道でもヒントになると思ってこの活動を立ち上げたところです。最近では、札幌からやってくる人たちが、一方的に学んで帰るだけではなく、学んだことを地域に実際に提案して実践する、バスツアーやスイーツコンテストなどにも取り組んでいるところです。そのあたりのプログラムは、学生や受講者の中から出てきたものを地域の人たちと一緒に実践するというので、お互いに学び合い、育ちあう。私は仮にラーニング・ツーリズムと呼んでいますが、これをツーリズムと呼んでいいのかわかりませんが、それが地域の対流、交流の仕掛けになると考えています。よろしくお願いいたします。

谷川：

NPO グランドワーク西神楽の谷川と申します。本日はよろしくお願いいたします。資料ですが、2枚もののイメージで考えていたのですが、こんな立派な、私のような老眼の方に優しい資料を作っていただきましてありがとうございます。この資料のページ数で順番に説明したいと思います。表紙を捲った2ページ目ですが、グランドワーク西神楽は、1994年12月に、「西神楽地域づくり研究会準備会」というものが発足しまして、その翌月の1月に阪神淡路大震災がありまして、その被災児童23名の受け入れを行政と企業のパートナーシップで実施しました。このことが大きなきっかけとなりまして、活動が始まりました。その後さまざまな活動を進める中で、持続性をもってまちづくりをするためには、法人格を取得してはという意見が多数あり、2001年10月にNPO法人グランドワーク西神楽として認証されました。そのあとも、東日本大震災のときには、福島の被災児童を1次2次合わせて63名、地域の皆さんのホームステイで受け入れを実現できました。私ども法人の特徴としては、地域の会員、地元の会員が6割、地域外が4割という点です。各会員は専門委員会に所属して、各専門委員会が独自に企画運営をしています。資料の5ページ目になります、旭川市の中で高齢化率が43.3%と最も高齢化が進んでいる西神楽地区の4つの集落で、活動を1996年から始めて20年あまりになります。先ほど参事官のほうからお話があって、全国の平均よりも北海道は10年早いと言っていました。西神楽は30年早く高齢化が進んでいるという地域であります。代表的な活動としては、10ページ目を見ていただきたいのですが、パークゴルフ場の造成・運営・維持・管理を一番小さな集落である瑞穂地区で実践している。15年間、高齢者の雇用創出や都市・地域住民の交流などさまざまな成果を実現することができました。2番目に小さな集落の聖和地区では、15ページになりますが、冬季集住・二地域居住のモデルを、国土交通省の支援をいただきながら、地域の空き家対策と独居高齢者対策及び、都市農村交流を組み合わせた事業展開をしまして、7年が経過しました。1ページ戻りますが、西神楽発の取り組みとしてもう一つは、ウィンターサーカスという冬季観光支援イベントがあり、今年で10年目を迎えて、多くの都市住民を迎えるよ

うになりました。直近の新しい活動としては、昨年より、住宅団地型既存住宅流通促進モデル事業というものを国土交通省の支援を受けながらスタートしたところです。これらのさまざまな活動は、グランドワークのネットワークやシーニックバイウェイ北海道の中のネットワークに参加することで、人材育成や人的交流が進み、実現できたと考えています。以上です。

横井：

「移住推進会議『移る夢深川』』というところから参りました、横井です。私は6年前に新潟から農村に移住いたしまして、現在200坪ぐらいの畑を、趣味の段階、家庭菜園で、お花を植えたり野菜を作ったりして楽しんでいるというところです。資料に基づきまして簡単に推進会議の中身を申し上げますと、この会議は三つの目的を持って行っておりまして、一つは、深川というところへ移住するための情報発信、二つ目には希望者の方々への支援、三つ目には実際に移住した方々へのフォロー、交流会。三点を事業として展開しております。組織の展開ですが、次のページで、H19から3年間の時限付きの展開として、総務省から「頑張る地方応援プログラム」というものがあり、それで深川では元気会議を発足しました。3年間の活動を終えまして、その後、部会があったのですが、私どもの会議は、移住研究促進部会が発展をして、現在の移住推進会議移る夢深川ということで、H22年5月から会議を設立しています。私はこのときに移住しましたので、このときから参加しております。会員は12名で、地元の方を含めたメンバーで年間6回ほど運営委員会等を開いています。深川市の地域振興課が事務局となっております。次のページですが、情報発信としましては、ホームページを立ち上げたのが20年6月と聞いております。(2)のパンフレット、移住した方々の声をまとめたものを22年に第一弾、25年3月に第二弾として発行しまして、それぞれ希望者へ送ったり、お試しの方に送っているということで、好評だと思っています。メディアを利用した発信も、過去3回ほどマスコミに取り上げてもらっています。二つ目の事業ですが、首都圏で行われています移住の相談会がありまして、ここに行政の方と、実際に移住した方とペアで出向きまして、実際のブースで、希望者に対し生の声を発信しています。これも好評でございまして、各市町村からのいろいろなブースがありますが、実際に移住した方が行っているというのはあまり見かけないということで、深川市独自かと思っています。過去5年間の実績はだいたい80組前後。北海道は人気がありまして、各市町村のブースでもほぼ同じような方々が回っておりまして、いろいろな情報を集めて帰っております。(2)としましては、市の主催事業があり、お試し住宅を深川市では4棟持っております。そのうち1棟はペットOKです。これは要望がありまして、ペットと一緒に、ということで、4棟のうち1棟はペットOKで、ほとんど空きがありません。あとは、移住体験者参加の意見交換会を行っている。多少アルコールも入れ、リラックスした中で生の声を聞いたりしているというところでもあります。5年間で、この深川市の移住、地域振興課の窓口を通して移住した方は、59軒で155の方が移住をして現在に至るということが結果として

表れております。以上です。

## ②日頃の活動を踏まえてご意見

小林：

ありがとうございました。短い時間で皆さんご遠慮されたのではないかと思います。ご紹介いただきました。引き続きまして、皆様から、今やっている活動の中で特に日ごろの活動で感じている問題点や、あるいは長くやっておられた方は平坦ではなく大変な時期もあったと思いますが、どう解決してきたか。活動の中での問題点。また、今後やっていく上で何が問題だと思っているか、率直にご意見を賜れたらと思います。特に先ほど説明された中で、あるいは行政に対する期待なり注文なり、ご遠慮なくいただければと思います。横井さんのほうから逆回りをお願いいたします。

横井：

それでは、私が過去3回ほど東京の相談会に行った時に、色々な方がブースに来ます。対応しておりますとだいたい2つのパターンがありまして、1つは、仕事を卒業して平穏な田舎暮らしをしたいという、俗に言うOB型の方もいらっしゃいます。もう一つは、現役ですが、北海道へ行ってのびのびと子供を育てて働きたいという現役の方がいらっしゃいます。どうしても分かれてくるんですね。その方々に共通しているのは、1つは、OBの方は卒業していますから、年金暮らしで良い、実際問題、働くところが一番ないですね。ですから、現役の方は仕事が欲しい。仕事があれば家はどうにでもなる、ということがまず出てきました。そうしますと、私たちはその場で返事はできないですね。職場でもないし、農家でもないの、返事ができない。そこで、困ったねとなってしまう。実際、この5年間の実績を先ほど申し上げましたが、お子さんを連れてきた人は、農家の手伝い、芋植えなどをやったり、冬場の雪の派遣などをやっています、安定した収入がない。そうしますと、なかには、ギブアップして帰ってしまう方も何人かいらっしゃる。そこでまず私が思うのは、誰でも良いからいらっしゃいというものではないなと思う。私の住んでいる深川は山の中で、畑、農地は余っている。農地が余っていて、後継者もない。ですから、一軒の中でかけもちでAさんBさんの家の畑を借りてやっているCさんという人もいるわけです。そうしますと、若手はフルで動いていまして、ちょっとけがをしますと出来なくなる。そんなことを考えますと、もったいないという気がしております。単純に農地があつて、パッと来て、できるかというところできない。私個人の考えですが、たとえば、芋を作る農家さんになりませんか？ピーマンを作ることを始めよう、あるいは、深川が産地であります、キュウリをつくりませんか、など、具体的な農産物を挙げてアプローチできればいいのではと考えております。ただ、問題になると思います。職業あつせんはできないし、現に、また、行政が農家さんに行つて

人を使ってもらえませんかというのも難しい。窓口へ行って、総合的に仕事が紹介できるお宅、1年ぐらいモニターで農家で引き受けてもらって、そこで経験を積んで、その後、家族を呼ぶなどできないか、と悶々とした考えでおります。結論は出ませんが、実際になかなか問題もあります。農地を買えないとか、お金がかかるといふのがありますが、まずはお金を行政等からまとめて出してあげて、1年見守ってあげて、将来独立などできないか。具体的なことはわかりませんが、受け入れ態勢を確実にしてあげたら、もっとブースで、「一緒にこれを作りましょう」ということが言えるのではないかと。そのようなことを考えておまして、今日の会議に来ました。長くなりましたが終わらせていただきます。ありがとうございました。

谷川：

自分たちが活動をやってきて感じたことをお話しさせていただきます。北海道内の地域活動の実践・継続する上で不可欠なのは、人材と資金だと思います。道内の様々な地域で活動に取り組んでいるどの地域団体も、このことが大きな課題となってなかなか前に進めないということが多く見受けられます。うちもその一つだと思います。そこで、資料の18ページ、後ろから3枚捲ってもらおうと思いましたが、西神楽でやったときの事例2のお話をしたいと思います。地域と自治体と国、三者が互いに資金を出し合って取り組んだ、地域活動拠点整備事業です。三者が資金を出し合うことで、それぞれの役割と責任が明確になりまして、地域の実情に合った資金の使い方が可能になったという事例です。これは裏話ですが、先ほどパークゴルフ場のお話をしました瑞穂という120戸の小さな集落の話ですが、120戸地域全員参加で、一番少ない人で80代のおばあちゃんが2万円。一番多いのは当時組合長だった80万円。それぞれ120戸全員が出して、1,480万という資金を集めました。その資金をもとに旭川市に相談に行きました。旭川市の条例で2千万上限で1千万という条例があったのですが、旭川市はお金がないから500万しか出せないという話になり、「わかった、500万でいい」と。その代り、市の職員を一人貸してくれ、と言ったわけです。40代の女性職員を、1か月、借りたという言葉が悪いですが、手伝いをしてもらって、いろんな助成金を探し、最終的には宝くじのお金だったのですが、1500万円申請して、登記してくれて。日曜日、会館で、地域全員参加で、市長以下幹部全員揃って、その担当者の彼女も出席して、地域代表の挨拶が終わって、地域の代表が彼女を前に立たせて、「会館が出来たのは彼女のおかげです」、ということで、彼女に一言もらったんです。その一言が、「自分は今まで高校を卒業してから40歳まで、旭川市の3,300人の職員の一つの歯車だと思って仕事をしていたが、今回、この事業に携わること、地域にどっぷり浸かることで、自分のような一職員でも、地域にこんなに影響力があるということを感じた」、と。そういう話をしてくれて、翌日の月曜日に市長が幹部を全部集めて訓示をしたそうですが、多分そういうことを一つずつ、それぞれ地域も行政側も体感するのが良いのかな、と思ったところです。次のページに絵がありますが、北海道35市129町15村のマップがありますが、その下。

マップの中で 35 市を除くと、144 町村がありますが、そこに地域マネジメント法人を設立して事業展開を進めることが実現できれば、北海道は大きく前進することが可能だと私は考えます。具体的には、人材面では、ここにも書いてありますが、全国公募で外部から 1 年採用して、都城市は月の委託料 70 万円で公募してまだ決まっていないようですが、そんなこともやっています。新・田舎で働き隊は研修手当 14 万だとか、地域おこし協力隊は 17 万だとか、そんなレベルでなくて、都城市のように外部から 1 名採用して、自治体からは 1 年、熱い思いをもった職員を地域マネジメント法人に出向させて、地域住民と地元企業と地元大学と一体となって資源や地域課題を活用した事業をここで創出します。人材育成面では、地域に有能な女性たちがたくさんいる。その女性たちの活躍の場を提供できるようなプログラムを柱にすることも重要だと考えています。資金面では、先ほどのように地域が 15% 出して、自治体も 15%。北海道も 30%、国も 40% 出資する。その中でマネジメント法人を設立して地域の様々な課題解決策を、地域自らが提案して、行政はあくまでも黒子となって支援するような事業スキームを確立することで、継続した活動が必ず実現できると考えています。

国レベルでは、次のページにいたずら書きをしたのですが、地方創生推進を本気でやるという意味から、各中央省庁を全国の都道府県に配置する。例えば北海道だったら農水省と書いてありますが、農水省の中にも水産庁、林野庁などがあります。それは、北海道はどこ、と決めれば良いだけで、例えばこういうふうに。沖縄だったら無条件で防衛省とか、福島だったら経産省とか、洒落にならないかもしれないが、京都は宮内庁とか。協議して決めれば良いが、こんなことが実現できたら、大きな経済効果を地方に生み出しますし、今言われている首都型大災害のときのバックアップ機能も国内に分散するという意味で重要だと思います。実は、行政機関の地方移転改革というのは、つい先月の 4 月 14 日の第 5 回「まち・ひと・しごと創生会議」でも委員の多くが提言されています。研究機関から先にやったら、だとか、いろいろな話が出ています。そんなことを本気でやるというのが今求められていると感じています。最後になりますが、行政に期待することというお話がありましたが、一番最後に公務員十戒と書いてあります。これは、元総務省の椎川さんが書いたものですが、こんなことを心のすみに持ちつつ、今後 30 年の北海道を見据えて、人口 400 万時代を意識した様々な政策を実行していく中で、従来の常識やルールにとらわれず、新しい仕組みにチャレンジしてほしい。強い思いを持って、地域と行政の方がかかわってほしいと願っています。特に、国土交通省北海道局は、北海道開発局の組織でしかできないことがたくさんあると思います。そこをうまく生かして、本日の会議資料を事前にいただいていたのですが、視点・論点がまとめられている。基本的な考え方は地域交流だとか多様な人材確保。対流の促進。施策としては完成度が高いと考えますが、では具体的に実現していくのかというのがなかなか我々には伝わってこない。そこのところをもう少しやってもらえると、いろいろな活動の後押しになると考えています。もう一つ、開発局さんに資料をいただいていた、今日の資料にもありますが、まち・ひと・しごと創生会議の 14 日の資料にもありますが、コン

パクト・シティ。これは私が言ったことを実現するためにまさに後押しになる政策だと思いますし。実は北海道開発局は「新しい公共」は、国土交通省が使い出した。「コミュニティ活動支援ファンド」など、新しい政策が提言されたにも関わらず、だが、その内容は、別の省庁が使い出している。もう少し、国交省には自分たちの良い政策を知ってもらう機会ということに広報も含めて力を入れていったほうがよいと日ごろ感じていました。最後になりますが、それぞれの地域を我々も、行政も大学も本気度といたしますか、本当にどこまでやるのかという本気度が試されているのかと。それによって道内でも地域間格差が出てくるかと思えます。簡単ですが、以上です。

小林：

次、お願いいたします。

坂本：

私たちの活動は 7 年目で、人材の問題も資金の問題もまだ山積みで、まだ克服していないので、あまり参考になるお話はできないかもしれませんが、先ほど、私たちが活動のモデルにしている欧州のエコビレッジのお話に触れました。2006 年～2008 年にかけて、主にイギリスですが、ヨーロッパのエコビレッジを 15 か所ほど訪ねて、そのときの体験をもとに今の取り組みを始めています。世界的に見るといろいろなパターンがありますが、欧米型は、60、70 年代に平和運動・環境運動の高まりの中で、いわゆるヒッピーコミュニティが発祥で、もちろん中には閉鎖的になって消滅する、地域と対立するということも多かったが、30 年、40 年、50 年という時代を経て、地域に定着しているモデルは、地域の産業には成り得ないが、コミュニティ・ビジネス、ソーシャル・ビジネスのレベルで経済的にも効果を発揮し、外からの訪問者も多くなるので、人口が増えるとか、子育ての環境として良質な環境が作られるとか、最近ではヨーロッパでは環境問題、温暖化に関するいろいろな取り組みが熱心なので、そういったところの課題解決として着目されています。ですから、60 年代 70 年代にはかなり、行政とも反目しあって、イギリスだと機動隊が出て、違法でスクアット (squat: 不法に居座ること) している住民の住宅を壊したり火をつけられるような事件・事故もいろいろあったようですが、最近ではむしろ、地方自治体が少子化問題や地方のいろいろな課題の解決策を担う一つの住まい方として、基準法を変えたり、何らかのサポートをしたり、デベロッパーや専門家が入ったりして、むしろパートナーとして誘致したり、促進するような動きに代わってきています。日本の場合は、土地に対する意識も欧米と違いますし、外から入った集団が旗を上げるようなコミュニティの形成はきっと馴染まないと思いますが、いわゆる、I ターン。私たちの活動もほぼ全員 I ターン組で担っていますが、日本では I ターン組だけでは難しい。やはりその地場の方、古い方々にいろいろ支えてもらわないと難しいと思っている。でも、外の視点を取り入れる、あるいは移住しないまでも、半町民的に通ってくる人たちがもっと増えて、中間的な、グラデーションのあるコミュニティというものも有

りではないかと思っています。私たちがやろうとしているラーニング・ツーリズム事業も、100人、200人の人が1時間滞在するのではなくて、一人の人が100時間、1週間とか2週間。うちに来ているボランティアだと、1か月、2か月、半年、一年という単位で滞在する若者たちが何人かいます。そういう人たちにとっては、故郷のような存在になって、将来戻ってくる人もいるかもしれない。いなくても、心の支えになり、何かあったときには駆けつけて応援するような、そういう仲間がたくさんいるというのが地方の強みになっていくと思います。これから北海道の町村も人口が減って行って、農業や一次産業の担い手が少なくなる時に、そういう人たち、特にクロスセクション、クロスジェネレーションというのがキーになると思いますが、農業の問題も農業だけで解決するのではなくて、いろいろな、横断的な専門家やステークホルダーと一緒にやっていく。世代を超えて一緒に取り組めるような地域が生き残るのではと考えています。私たちのところは、暮らしというテーマだと、いろいろな課題や資源が出てくるので、そういう意味では、必然的に横断的な団体と取り組みが実際に出来上がっているところですが、活動をやっている一つ思ったのは、いきなり全ての生活をシフトするのは難しい。エコビレッジというと、「あっちの世界の人」というような感じがして、いきなりサラリーマンを止めて移住は当然のことながら難しいし、そうする必要もない。都市部は農村を支え、都市の生活が地方に支えられているというのは間違いないですが、両方が共存していくバランスが大事だと思っていて、少しずつシフトしたい人たちにとっては、いきなりはできなくてもお試しができたり、練習ができたりする環境や期間が必要だと思います。新規就農をしている仲間たちを見てみると、やはり相当大変です。いろいろな補助、国の助成制度も出来てきていますが、やはり大金を借金しながら、技術もマーケティングも全部自分たちの力というのは非常に苦勞も多い。ロットが少なくてなかなかマーケットが開拓できない農家を、私たちのような中間支援団体が集めて、こちらで作ったものを隣のレストランで加工して、食べられないものはコミュニティの人たちが食べて。あるいは札幌などからやってくる人たちに定期宅配するような、ネットワークがあることでロスの少ない事業、ビジネスになっていったら良いのではないかと考えています。そういう意味でも、農業の分野だけではなかなか解決できないことをいろいろな人たちがつながって、というふうにできていけたら良いと思います。その役割を都市住民が担っていく。都市の人たちが農村の現場に関わって、「こんなふうには作っているのね」、「こんなに苦勞しているのね」「こんなに楽しいのね」ということを体感してもらって単純な消費者・お客様ではなく、共に生産する仲間。「共生産者」という言葉を最近学習したのですが、共に生産する仲間として作り手と使い手が参加していく。そういう地域が私はたまたま余市でやっていますが、余市に限らず北海道ではできるのではないかと。正直、海外から戻ってきたときは、私は出身が関東なので、家族も関東におりますし、この分野は関東の方がいろいろ活動も先駆けて盛んなので、向こうでやろうかと思ったのですが、大学からこちらにお世話になっていることもあって、北海道でやろうと決めました。そのときの理由の一つは、自然環境。いわゆる生産空間という点でいうと、これだけ豊かな場所はない。もう一つは、北海道が、

新しい文化をつくっていく土壌としてはとてもやりやすい。文化とか故郷は、本州だと守るものだと思いますが、北海道はつくっていく、クリエイトしていくことがやりやすいのではないかと。若い人、外国人、女性など新しい人たちの参加を受け入れられる土壌があるなど考えていて、そういう意味では将来もそれほど暗くはないと思っています。以上です。

小西：

豊正地域は20年以上前ですと農家が100戸近くありましたが、今は40戸の農家になっております。内35戸の農家の組織で作られた協議会なのですが、普及センターの協力で今、5年目になっております。実際に営農技術を身につけることで安定的な収益を得ることがこれからは十分出来ると思っていますが、現実的な問題になりますと、全国的な問題だと思いますが、人口減少による過疎化や限界集落など、課題を感じています。わたくしたちの地域も農村の魅力を感じていただきたいと工夫を重ねまして、呼びかけをしても交通機関が限られ、車の運転をする方しか現地に足を運んでいただくことができません。その中で口コミだけが情報手段なのだと感じております。生まれ育ったこの地を離れざるを得ない方達が毎年続出していく中で感じていることは、規模を拡大しながら農地を守り、生き残りをはかっていかなければならないという意気込みを持つ若者たちは、農業の価値観を収益に向けることしかできない状況に追い込まれていると感じております。地域住民や消費者の集いや交流があり、自らが地域や農業に魅力を感じることができて、初めて地域を守ることができるのではないかと考えています。次世代の若者と共にこの地で暮らすためには、という思いで、農業者有志で立ち上げました、先ほど説明させていただきましたが、北の大地マルシェ準備委員会は、地域住民と消費者との集いや交流の拠点として、農業の中でできる最大限のことを生かして、心身に障がいを持つ方、福祉の分野でも幅広い活動を考えていきたいと思っています。最後に、北海道総合開発計画は昭和27年より始まり、長い年月で進められてきており、私たちの農村地帯も自然を破壊しない、期成会事業等のたくさんの恩恵を受けてまいりました。その感覚からこそ、地域資源の活用ができ、目に見えない癒しや心の豊かさが生まれてくるのだと感謝しております。理想ではありますが、農村や地域資源を活かしたバリアフリー環境の経済効果などによる健常者・障がい者などの雇用に向けた取り組みの支援をお願いしたいというふうに感じております。

奥田：

あまり考えたことのない分野のお話ばかりで頭が混乱しておりますが、私は実は岩見沢の市民としてすぐ近くに住んでいるのですが、築30年の家を買ってリフォームして住もうかと思って住みたいと思いながら大学に勤めているわけですが、どういうふうにしたら人が来るかと考えたときに、教育大学という立場ですので、子育てをしたいという環境が重要だと思います。私の専門がスポーツの分野ですから、今までに運動すると体力が向上する、メンタルに良いとか、記憶力、認知力が高まるということは言われていまして、運動

すると体が強くなるという以外にいろいろな要素がある、と。運動はてっとり早くいろいろなことを賄える、ということで、何か大学を中心として子育てをしたいと思えるような環境を作りたいと思い、ボールゲーム教室を始めました。ボールゲームの教室と言いましてもどこにもあるものですから、やはり大学がやることです、何か理論的な背景が良いだろうということで、ドイツのハイデルベルク大学というところのプログラムを持ってきて、こちらでいくつか実践を重ねてプログラムを始めます、ということで公募しました。4月14日に、初めてやってみると、参加者が0人。誰もいない。それから次の週、これはもう、学生スタッフも呼んでいるし、申し訳ないと思いうちの子供に声をかけ「誰か友達を呼んで来い」と言ったら、友達を呼んできました。メンバーが5人になりました。それから1年間で50人まで増えました。ほとんど幼稚園の子供たち。少し思ったのは、日本全国、学校教育は、日本ではすごくしっかりしてしまっていて、どこへ行っても同じような教育が受けられる。似たような教育。自治体や大学がやらなくてはならないのは、学校の教育以外をどう充実させるかが重要と考えています。我々の大学でやっている教室は、背景は子供の遊びの場がなくなってきたところから始まっております。子供の遊び場がなくなったことで、トップ選手のプレーの発想、創造性も低下し、子供の運動習慣がないから、若年性糖尿病などにつながっているとも言われていますので、遊びで子供が楽しんで取り組める。しかも継続的にできる、そういうことをやりたいということで教室が開発されたのですが、本来ならば、そういう子供が遊べる場を確保していく。北海道であれば冬場、半分ぐらい雪があるのですが、その中でも外に出て活動できる場。そういう場をつくっていくと、わざわざこういう教室をつくって親に送り迎えしてもらわなくても、そういう問題が十分にできるのではないかと考えております。我々はこういうプログラムをいろいろ開発していくということですが、別の方面では、遊びの場をつくり、遊びをやる仕掛けをどう作るか、ということが大きなテーマでないかと考えております。

それが1点目で、2点目は、先ほどお話ししました障がい者のスポーツの件ですが、バレーボールの試合をご覧になったことがあると思いますが、男子と女子でネットの高さが違います。当然、女子が男子と同じネットの高さでやってしまうとゲームとして面白くない。女子の平均身長に合わせて降ろしているということがあります。障がい者スポーツと健常者のスポーツの違いは何かと言いますと、ルールの違いだけです。要は、車いすでできるかどうかということだけです。先ほどもお話ししたように、車いすの方が普通の歩道を車いすで移動していると、段差もあってデコボコだし、障がい者だ、大変だ、というふうになるが、車に普段乗っていれば誰が障がい者か、そんなことはわからないし、要は、環境が、誰でも対応できる環境であれば、障がい者とは言わないということになります。そういうふうを考えてみましたときに、ヨーロッパではリフト付きのバスがあり、バスが止まると勝手に降りてきて、登れる。障がい者だけではなく、私が見たときは、ベビーカーの人が待っているとバスが来て、リフトが降りてきてまた上がっていく、と。それが当たり前なんです。障がい者対応というと障がい者だけを言っているのではなく、当然高齢者もですし、小さい子供の

いるお母さんも、ということになります。ユニバーサルデザイン。そういうところが日本では、まだまだ欠けている。今後、パラリンピックの合宿の誘致なども行いたいと思っておりますが、そういうところが背景になりまして、うちの大学もバリアフリーの体育館をようやく作りましたし、考え方に関することをまずやる、それを手っ取り早くできるのはスポーツではないか、ということで、こういう活動をいろいろ進めているところです。チラシを入れていただいたのですが、今度アダプテッド・スポーツという、こういう考え方のイベントをやろうと考えています。これも、先ほどお話ししました内容です。それを広めるためにやっていきたいと考えております。課題としましては、私の方では今、教育という点からのみ、こういうお話をさせていただいていますが、産業や農業といったところとの関わりが必ず必要なのですが、私の中ではイメージが湧かないものでして、こういう場でいろいろお話を聞いて、頭が混乱しているというレベルですので、そういう意見交換をしながらお互いがどういうふうに絡んでいけるかということを考えていかなければいけない、というふうに考えております。以上です。

石渡：

私のほうから、ガーデンを通した観光ということでお話しさせていただきたいと思えます。配っていただいた資料にはバラ園の紹介等が書いてありますが、最後の北海道ガーデン街道の提案のところに触れていきたいと思えます。本州の方々から見た北海道のイメージというのは、豊かな自然、道路が広い、そこに行けばゆったりした気持ちになれる、というかたちでイメージを持たれていて、それにあこがれて移住されてくる方もいらっしゃると思えます。また、中国などアジア圏の観光客の方たちも北海道のガーデンにあこがれを抱いて遊びに来てくれる方が今増えています。北海道のガーデンと、と本州のガーデンの大きく違うところが、やはり北海道は、寒暖差があるということで、本州だと6月にアジサイというように、何月に何が咲くか分かれていて、花を見ることで季節感を感じるということがあると思うのですが、北海道においては、長い、半年の冬が明け雪が解けていき、一気に温度が上がってくると全てがいつぺんに咲くという、本州では絶対に見ることができない花の組み合わせで、ガーデンを楽しんでいただけるということが大きな魅力となっています。それから、朝と昼間の温度の差が大きいことで、花色がはっきりしている。本州で同じ花を見てもこのような綺麗な色が出ない。こういうことが北海道の庭の特徴だと思います。そういうところに着目されていて、北海道ガーデンという言葉も徐々に好きな方には定着しつつあるのですが、そういうことを大きく掲げているのがガーデン街道になるかと思えます。ただ、北海道は広く、気候も地域によって大きく違う。私の場合だと、バラを育てるにも、苫小牧は寒いのに雪がない。岩見沢は雪があつてそれなりに寒い、旭川は雪があつてもものすごく寒い、と言う感じで全然違う。育てられる品種が違う、ということがあります。庭の植栽も、植えられる種類が変わってくるので、見ることができる風景が大きく変わってきています。北海道と一言で言っても、これだけ広く、道北・道南、道央、全部、庭の雰囲気

気が、デザインという面は置いておき、育てられる植物が違う、自生している植物が違うということを見ると、一言で「北海道の庭はこんな感じ」といえないということがあります。それは、まだなかなか知られていないことですし、公共施設に限らず、民間のガーデンも増えています。それぞれいろいろな取り組みをしていたり、それぞれすごく大きな魅力があるということで、近隣で手をつないでガーデンチケットをつくったり、ガーデン街道のようなこと、取組をしているところもあるが、なかなかそこまでまだ大きな取組にはなっていない。その中で、北海道ガーデン街道は成功しているのではないかと思います。そういうことを考えると、これからのガーデン街道の展開として、今は、旭川から富良野・帯広までのラインですが、それ以外のルートも、先ほどもお話ししましたが、いろいろなパターンのルートをぜひ開拓していただいて、それぞれのガーデンが持っている魅力や、そういったものを汲み取ってガーデン街道のホームページを見れば北海道全部のそういった情報がわかる。今のホームページで言えば、どこからどこまではどのぐらいの距離で、どのぐらいの時間で行けるということが一目でわかるものが今後できていけば、よりツアーもくみやすくなりますし、北海道は移動時間が問題になってくるので、そういうことがはっきりわかってくれば、行ってみようか、今度はこっち方面を回ってみようかというかたちで、リピーターも増えてくるのではないかと考えております。大きな都市で、力があるところは自力でどうにかできるようところもあると思いますし、企業力も大きいですが、なかなかそうはいかないところとか、厳しい中で経営しているガーデンもたくさんある。良いところなのにもったいないというところもいろいろあります。ぜひそういうところを支援していただけるような形があれば、より北海道全体で大きなガーデンとして、とする考え方がだんだん広まってきたので、北海道ガーデンショウなども開催されるようになってきていますし、これからは、歴史の浅い北海道のガーデンですが、だんだん独自のガーデンが周知されつつあるので、そういったところでぜひ国の方からも支援してもらえると、多くの人がある、豊かな緑の北海道というイメージで、期待を裏切らないかたちでの観光ということもより広まっていくと考えています。短いですが以上です。

## 5. 意見交換

小林：

一通り発言が終わったのですが、全体で何か言い足りなかったことなどがあれば。あとは他の方のご発言で質問事項などがあれば。ございますでしょうか。北海道局のほうは。質問や意見など。

山口：

移住・定住について、課題が三つあるとお聞きしているのですが、一つは仕事の話、二つ目は住宅、もう一つはコミュニティ。濃密すぎる人間関係が良いか悪いかということを含め

て、仕事の話はありましたが、住宅やコミュニティの人間関係についてははいかがでしょうか。

横井：

今のお話ですけれども、空き家はいっぱいあるのですが、農家は、家を売るという感覚はないんです。おじいさん、おばあさんがいて片方の方が亡くなられて、お子さんのところへ行ってしまう。札幌に出てしまい、農家の家は余っている。私たちのところにも数軒あります。そういう家はあるが、行政の窓口のほうへ、「空いているから貸してあげていいよ」という声は出ないんです。実際問題、ネットにも載っているのですが、あくまでも市街地のことであって、不動産業者が持っている情報が流れているのですが、本当の農家はいっぱいある。私の町内には 24 軒しかないが、この 5 年間に 5 軒の方が農家を辞めて、空き家のままで、あるいは一人暮らしでいる。もったいないですね。ですから、さっきお話した通り、仕事がお世話できれば、住まいのほうは、なんとかなると思います。さっき敢えて言わなかったのですが、確かに、物件はたくさん、安く提供できるものがあります。もちろん改修は必要ですけど。私も、入った時に、38 年間使った家を深川市の紹介で買いまして、改築などをしているのですが、値段的には、買う時の価格は、びっくりするほど安い価格で求められるというのが現状です。もったいないんだけどどうしていいかわからない。口コミで聞くと、「あそこの家のおばあちゃんは札幌に行っちゃったよ」「年に 1 回来ているが日ごろは空き家」という情報がある。そこはちょっと手が出ませんが、そういう状況です。

コミュニティは、市街地のほうは町内会がしっかりあるが、農村部は、助け合いの精神が生きているので受け入れてくれますね、非常に温かく。農家さんは温かいです。農家でなくても、助けてくれる。助け合いですから。いろいろな意味でまとまっている町内会が多い。300 ぐらい町内会があるが、旧深川地区と旧音江地区があり、特に山手の方の方はそんな感じであります。一つ問題は、突然入っても、町内会の会合などに顔を出すのを渋ると、浮いてしまって、なかなか仲間になれないということがあります。入った方は、積極的に地域に飛び込んでいった方が良いような気がしております。

小林：

谷川さんのところは空き家の問題についてお話をいただければと思います。

谷川：

うちの場合は、集落ごとに空き家のランクを作っている。空き家はあるが、どこにどの空き家があるか分からないというレベルでは、なかなか移住・定住につながらない。空き家の分析をすることが重要。例えば、A ランクはすぐに住める住宅。B ランクは改修をして住める住宅。C ランクは解体。というようにきちんとまず分けて、地域の人を持ち主が、先ほどもお話がありましたけれど、いっぱい農家の宅地があるのですが、需要はあるんですよ、新

規就農者とか、二地域居住者に貸してほしいとか。だめな事例はこういう事例です。一人暮らしのおじいちゃんかおばあちゃんが施設に入ったが、まだ施設では生きている。変な言い方ですけど。仏壇がある。で、貸したいけれども貸せない、ということもある。うちはどうするかというと、ひとまず全部片づけてしまって仏壇もまとめてしまって、空いたスペースを貸す。地元の方は、本州の人が借りたい、買いたいと言ってもまず貸さないです。めんどくさがる。うちを仲介してやるとちょっと信用してくれて、契約書も全部うちでつくって、うちで担保をつけると非常に安心して。一番多いのは、現状で、何も直さない、壁を壊そうが、釘を刺そうが自由にしてもらおう。その代り、一切管理はしない。それで良かったら、1万円でもいいよ、2万円でもいいよ、というレベルで、300坪の土地に納屋と住宅と車庫がついたものを借りられるわけです。それを買いたいとなると、ほとんどの場合は坪5,000円ぐらいで、300坪の土地に納屋と車庫と住宅がついて150万。そういうものを本州の企業に買ってもらい、解体して福利厚生施設にする。あるいは、六本木でプレゼンをやってきたのは、40代の女性たちが潤沢に資金を持っているものですから、既に長野に別荘を共同で借りているというような人がたくさんいる。そういう人たちに、借りないで、品川で2時間で来るから、共同で買って、と。150万で。そして、新しく建てて、と。そういうふうをお願いして、勧めている。地元の方が安心して貸せる、売れるというのは、やはり地元の方が仲介したほうが、地元の方もスピーディに。先週も、千葉から来たご夫婦ですが子供さんが4年生と2年生。仕事を辞めて仕事も決めないで来てしまっている、勇気のある人なんですけど。我々はちょっとびびって、住宅は大家さんにちょっと直してもらって、一昨日だから水曜日、彼の仕事を何とかしなければ、と地域が気にして、とりあえず援農に行ってもらおうか、とか、この仕事を組み合わせれば30万になるね、とまわりが勝手に心配して。そういうことがある。あと、うちの場合は仲介をするときに必ず条件がある。賃貸契約にありまして、必ず地元の町内会に入る、という条件に謳ったんです。都会の人で嫌がる人もいます。が、実際に入ってみるといろいろなことがある。朝起きたら玄関先に野菜が山積みとか。そういう、インセンティブと言ったらおかしいですが、良い目にあうものですから。最初は強制的にしているが、結構、それでコミュニティとうまくいくこともある。空き家の問題も、きちんと具体的な情報を公開するということと、地元が仲介すること。そして町内会にも入ってもらうということで、住宅と集落の問題。仕事だけは、悩ましいところもある。

小林：

小西さんのコミュニティという点で、小西さんはずっと岩見沢のほうにいらっしゃると思いますが、外からやりたい、入ってくる方は結構いらっしゃるのですか。地域外から。そういう人たちを受け入れるときの課題はありますか。

小西：

特別、課題というのはないですが、私の場合は直売所の中で、障がい者さんの作った農産

物の受け入れを行っているのですが、最初は関わることに不安もありましたけど、実際に関わってみると、発達障がいレベルの方がほとんど外に出ていられているので、実際はそんなに心配することはないと実感しているところです。あとは、東京など人が大型バスで畑に見学に来る方が多いのですが、あとは収穫体験。そういうところでは、直売所のお客さんとして、突然来る人に、対応できないときがたまにあるので、せっかく来られているのにご迷惑かな、配慮が足りないと思っているところがあります。あとは、イベントなどの受け入れを年に何回かやらせていただいています。満足して帰っていただけているように配慮はしているつもりですが、また縁がありましたらご指導いただきたいと思っております。

小林：

坂本さんは、そういう意味で言うと、縁もゆかりもない、地域との関係はいかがでしたか。

坂本：

本当に縁もゆかりもないところに落下傘部隊のように入っているのですが、ここでやろうと決めた理由の一つは、ご近所は古い生産者の方、完全に農家しか住んでいないエリアですが、古くから住んでいる方々がサポーターティブだったということと、新しい、30代40代ぐらいの新規就農者がいて、一緒にタッグをくんでやれそう、ということが決め手でした。それ以外にも、札幌からのアクセスや、好条件で土地を賃貸できたこともあります、一番大きかったのはそこですね。特に新規就農で、有機無農薬でやりたいなど、自分の思い入れで、独自の技術で、農協さんに出荷しない方法でやろうと思っている農家さんなどは、ともすると地域の中で浮いてしまったり、薬の使用の問題に関しては隣接している農家とトラブルになると相当こじれることもあるので、そこは気を付けてやらなくてはならないと思っていて、私たちが畔や境界などは必ず草刈りをし、地元のいろいろな行事、神社のお掃除、道路組合の清掃などには、うちの若いものをいっぱい連れて積極的に参加しています。なかなかそういった地元の草刈りなどの行事に若い女の子が大勢来ることはあまりないので、そういうときに喜ばれます。私が行ってもカボチャか芋しか出てこないのですが、そういう女の子が行くとスイカやメロンが出てきます。

山口：

せっかくの機会なのでまたちょっと教えていただきたいのですが、仕事の話ですが、一つの仕事で生業を立てることができれば良いですが、全国の事例で見聞きすると、小さな仕事をいくつか、例えば1年間で5,60万の仕事を5、6個やって、年間の生業とするという事例もあるようなんですけれども、里山ガイドのツアーをやったり、新聞配達だったりとか、無農薬の米を作って消費者に送るとか。そういうような小さなビジネスを積み重ねて仕事にして、生計を立てるといっても全国的にはやっている例があると聞くのですが、可能性はいかがでしょうか。

谷川：

うちの事例ですけど、今 58 歳の方。彼は 2 年前から聖和小学校の用務員さんを月に 15 日。二人いて交替なんですけれども、その合間にパークゴルフ場の受付をやって、それからうちの協議会の通院送迎と買い物。三つやって、学校が 12 万くらい、パークゴルフ場が 4 万くらい、通院送迎が 5,6 万くらいという感じです。例えば、そういう事例とか、あともう一人、起業した人は 60 歳、定年で来た方。その人は 2 年前に起業して、農業支援。大規模、小規模の農家を支援するのに夏はびっちり農作業をし、冬は除雪。小学校の屋根の雪下ろし。高齢者の自宅の屋根の雪下ろしで、旭川の普通のサラリーマンの年収より高いですね。今おっしゃったように、2つ3つなら地域でも現実的な話になる。そういう組み合わせの仕事を提供できるかどうか。困っていることはいっぱいあるんですから。それを二つ三つやると、ビジネスになる。どの地域でも課題は違ってても当てはまるはずなんですよね。それはあきらめないで。北欧ではもう、日本で言ったら NHK の職員、フィンランドでは国営放送の社員がログハウスの会社の共同経営をやったりしている。あたりまえにやっている。二つ三つなら OK ですね、子育て世代でもいけると思います。

坂本：

うちでは、月 3 万円ビジネスと呼んでいるのですが、月 30 万をコンスタントに稼ぐビジネスを創り出すのは難しいですが、3 万円ビジネスを一人で 5 つ、6 つ持つことを目標としています。基本的な家賃・光熱費・食費がほとんどかからないような、生活コストの少ない生活スタイルが前提になんですけども、農業以外に、ツーリズムのガイド、宿泊、うちはファームインのようなこともやるので、そういうことを組み合わせる。それをチームでやることで、どちらかがアウトになってもどちらかに頼れる。今、修学旅行生の受け入れも行っているが、農家が忙しい時は、うちでご飯を食べさせて、昼間のプログラムだけ農家に行ってもらいとか、寝るときはこちら、など。そういうチームで実現しようとしています。

小西：

うちの場合は、土木建設業と農業の兼業農家で、完全に、農業より土木業の収益が高いです。農業の場合は、農閑期は土木業の収入があるので、通年収益がございます。どちらも社員というかたちで株式会社から支給される方法を取りながら生活しております。社員に關しましては、土木業の社員は土日とか、従業員の場合は休まれるがおりますけれども、ほとんどの対応を会社内と、農業の株式会社との間で行き来をして、土日の場合、農作業の体験、パートさん 2 人ですが、そういうような形で行き来をしている状況です。

小林：

横井さんのところは先ほどの話だと仕事をちょこちょこやってもうまくいなくてギブ

アップという。それは、仕事は紹介する場所がないのか、ご本人の問題なのでしょう。

横井：

やはり、農家が人を欲しいときは、人が足りない。身が一つしかありませんので、あまりあちこち行っていると、いつ頼んでもだめだ、ということで農家さんにもあてにされなくなる。それで浮き上がってしまう。まあ、決まっていますけど、冬は除雪、春は田植え、芋植え、ということで、あとは牧場の業務などで、1年間に3つぐらいは掛け持ちしていますね。奥さんも共働きで動いていますからやっているのでしょうかけれども。1か所に1年間というのはないみたいですね。

小林：

谷川さんのところでは、さっきの仕事ということで、コーディネートはあるが、自分で見つけるということはあるのでしょうか。

谷川：

いえ、全部、農業支援員制度導入協議会がありまして、そこで派遣してやる。旭川市内の若い夫婦。土日休みですよ。農家に土日夫婦で来てもらえたら、一日1万円以上になるので、二人出来たら月16万円になる。夫婦で働いて。そういう人は味を占めたら必ず来てくれますから。冬の建設業の除雪は時給2,000円ですから。今、派遣会社の農作業で1,800円。そこにいた30代の若者が起業して1,300円の単価を設定したらたくさん人が来てしまい、人が足りなくなり、旭川から募集してもだめで本州からも募集し、うちの西神楽の空き家を貸している。そこを宿舎にして。もともと派遣会社で働いた人が起業したり、退職した人が起業するとか。そこがコーディネートしている。空き家情報、旭川市に問い合わせに行ったら、だいたいうちに来るんですね。振られて。そこで、そういうふうに紹介する。あとは本人の問題もあります。続く、続かないの点でいうと。収入的に言ったら、旭川のサラリーマンは賃金低いので、それよりは真剣に働く気になったら、働ける環境はあるということです。コーディネートは必要で、ないとなかなかだめですね。

石田：

ちょっと一つ聞いてよろしいですか。谷川さんにばかり質問で申し訳ないですが、冬季集住、夏に二地域居住するというのが第7期の北海道開発計画に書かれています。ところが、他の地域では全然広がっていない。良いシステムだと思うのですが、なかなか他の地域では広がらないという、課題。課題が書いてあるのでそれをご紹介いただきたいのと、さらにもう一歩進んで、人口減少は避けられない。夕張は、炭鉱住宅20戸のうち1戸か2戸だけ入っているのを、とりあえず拠点に集約して、最終的に町中にとというのはあるみたいですが、集住させるという施策も今後必要になってくると思うが、冬季集住もなかなか難しい中で、

集住というのはどうなのか、ご意見を聞かせていただきたい。

谷川：

平成 20 年からやっています、うちの場合は、きっかけは 96 年に西神楽に移住し、町内会活動で総務部長をやって地域の人と知り合ったとき、当時、98、99 年ごろ、ある一時期、夫婦の片割れが亡くなり、一人になり、札幌の息子のところに行ったり、旭川の施設に入ったという人が急増した。地域から出て行ったお年寄りが、1 年以内にみんなバタバタと死んでしまう。お葬式の案内が来て。多分環境の変化だと思います。今まで自分の家のまわりに畑を作って、野菜を作って息子や娘や孫に送るのを生きがいにしていた人が、突然札幌のマンションに来て交流もなくなったらおかしくなってしまう。施設も同じことで。そういうことがきっかけで始めたのですが、実際にやってみて、年間に相当数、全国から道内に視察に来ています。うまくいかないのは、はっきり言いますが、何とか県議会さんが 10 人来て視察していても、本気度が全然ないし、本当に困っていないから、だから上手くいかない。去年は深川に来た人がいたが、真剣。しょっちゅう来て、今年から動き始めた。だから本当に困っていて、本当にやりたいところは地域にあったやり方でどうにでもなる。空き家はあるし、元気な老人はたくさんいる。やり方がどうこう言うよりも、本気度が無いから。本当に困っていないから。下川などでは集約していろいろやっていますね、あれはもう一つの方法だと思います。

うちでは空き家が 75 軒ある。77 歳以上の独居の人が 120 人以上いる。失礼な話ですが、5 年 10 年で 120 軒空き家が出るということですから。それをどう生かすか、ということが切羽詰って、ある。実際にやっていて困っているのは、冬季集住は 1、2、3、の 3 カ月。おじいちゃんチームとおばあちゃんチームがいて、昼と夜の食事を出し、一日 1,000 円。電気水道ガスは無料。夏場はマンスリーで一棟 6 万円で貸しています。それを、正味 6 か月で、36 万の収入があり、それを電気水道ガスに充てて余るから温泉に行ったりできる。その繰り返しで行けばいいのですが。

ところが、冬季集住した老人が 1 年じゅう住みたいと言い出したんです。要するにずっと住みたいと。自分の家を売って良いから、と。田んぼの真ん中なんですけど。そうすると原資がなくなるので、違う方法を考えなくてはならない。今、真剣に悩んでいるんですよ。4 人で 1 軒にしたら灯油代も電気代も 4 分の 1 で済むわけだから効率が良いが、1 年中やったらどこからその原資を出すか。お年寄りが一日 1,000 円以上出せるか。農業年金は少ないですから。目途として、2 万 5 千、3 万ぐらいだったら集住しても払っていけるかと思うんですが、5,6 万も、下宿代のように上がったたらちょっと厳しい。そこが悩みです。

普通の空き家を改修し、お年寄りを冬の間住ませ、夏は観光客に貸して回していく分には回る。1 軒では人件費が出ないですが、5 軒、6 軒、7 軒とやっていくと十分プラスで回る。ただ、ずっといたいと言い出したのが今一番の悩みです。

おじいちゃんたちの 1 番の問題は、食事です。夜、食事をする人が本当に少ないです。近

くのスーパーやコンビニで弁当を買ってくればまだ良い方で、だいたいは酒を飲んで終わり。おばあちゃんたちは、食事はきちんとしています。朝起きてラジオ体操をして。でもおばあちゃんたちの弱点は、足です。買い物や通院など、モビリティの確保が最大の弱点。はっきりしているんです、両極端で。おじいさん 2 人とおばあさん 2 人、一軒の家で一緒に共同生活をしてもらうのが、一番お互いに良い。おばあちゃんたちが食事の世話をし、おじいちゃんたちが足の代わりになってくれれば、固定費が不要になる。年中そこで暮らしてもらってもよい。実は今年、ちょっと実験をやったんです。おじいちゃん 2 人とおばあちゃん 2 人。照れちゃってね。個室だから良いが、いまいち、ちょっと抵抗がある。田舎のおじいちゃん、おばあちゃん。若者だったらシェアハウスなどもあって良いんですけど。本当はそれをやってくれれば。根気強く進めれば、本当はそれをやってくれたら、お世話する人がいない、人件費もかからないので、十分に回る。今一番の悩みどころで、5 カ所、冬季集住のところを整備したのですが、もう 5 カ所ぐらいあれば人件費、通年で人を雇えるかと思うんですが、そういう悩みはやっていく中でどんどん出てきます。

桜田：

奥田さまにお聞きしたいのですが、東京オリンピック・パラリンピックの合宿地を目指しているということですが、具体的に何かターゲットがあるのかということと、パラリンピックは体育館だけではなく、選手の居住スペースや交通手段など、広がりをもったユニバーサルな施設が必要になると思うが、そのあたりの行政との連携など、どのような取り組みをされているのか、お聞きしたい。

奥田：

合宿の誘致ということですが、岩見沢市と一緒に、車いすのバスケットボールの協会など、何団体あったか覚えていないのですが、一緒に行って、こういう施設があります、ということで、声をかけられるところはほとんど回らせていただきました。課題がいくつもありまして、岩見沢というところを考えますと、空港からはバスで来られますし、上のほうに見晴しの良いところもあって、合宿をやるには良いのですが、やはりいつも問題は宿泊。車いす選手に対応したホテルはほとんどない。あってもホテルに一部屋、二部屋で、選手に聞くと実際に使えない。お風呂に入るときに段差があったり、狭すぎて回転できないなど。実際に使えるところはほとんどないというところなので、車いすの選手はホテルに行ってもほとんどシャワーを浴びることができないような状況。だいたいホテルに一部屋、二部屋ですから、とても合宿所としては使えず、状態の重い人はかなり大変なので、いつもどうしようか、ということで、札幌のほうに泊まってもらい、そこからバスで送り迎えをしている状況です。何度か大会をやっているが、いつもそうです。ぜひ、このへんに合宿施設を、というのはいつも思うことなのですが、合宿施設を建ててしまうと、オリンピック・パラリンピック後にその施設をどう利用するかという問題がいつも出てきますので、そのあとも考えて使える

ものを、ということが課題になっていると思います。

小林：

他は何かありますでしょうか。石渡さま、ガーデン街道の話がありましたが、花を見に来るといった関心が高まっている実感はありますか。

石渡：

そうですね。今は行政単位でもアジア圏の観光客の誘致に力を入れているとうかがっていますが、実感として増えているという感じがありますし、北海道らしい風景などに対する関心が高まっているように感じます。

山口：

ガーデン街道を見ますと、「風のガーデン」等、物語を中心として広がっているように思うのですが、新たなルートを開発するときに、皆さんで集まって何か物語をつくるというような取り組みというのはいかがでしょうか。

石渡：

既存の施設を基盤にするのでどこまでできるかわからないのですが、「物語」をつくることはできるかもしれないですね。気候でいうところ、そこでしか見られない風景はわかっているもので、そういうものを元に作ることはできるのではないかと思います。あとは、リゾートウェディングなどが流行ってきていて、そういったところでも、若い人たちに北海道に関心を持ってもらうのに、ガーデンウェディングができる施設も増えてきているので、そういうところでのストーリーも作れるかもしれないです。

今：

道東の方だと、ヨーロッパの人がたくさん来て、バードウォッチングをしている。それもどんどん広がっている。ガーデンはイギリスなどは関心もあって、そういうところから外国の方に広がっていくきっかけになる。バラなどは外国のほうが種類もいっぱいあるのではないですか。

石渡：

そうですね。あとは、北海道と本州で、植えられる品種が全然違うということもあって、北海道はどちらかというと北アメリカやカナダなど寒い地域の品種が多いので。日本によく流通しているバラを見ている人からすると、「こんなの見たことがない」というバラも気候に合ったりするので、広がるのではないかと思います。

今：

谷川さんの資料の中の、3ページ捲ったところですが、シーニックバイウェイ北海道のネットワークの資料ですけれど、濃い緑の部分はシーニックバイウェイのネットワークがあるところなんですけど、石狩、空知のところ。今提案があった、旭川、札幌、千歳間はちょうど空白地帯なんですね。だから、12号と234号にどのぐらいガーデニングをやっている方がいるのかわからないのですが、シーニックバイウェイということからいうと、空白地帯なので、面白いなと思ったのですが。

小林：

ご参考にいただければ。

今：

横のネットワークというものはあるんですか。

石渡：

小さいですが、個々の施設に視察に行かせていただいたときに、担当者の方と顔見知りになって、お互いのパンフレットを置きあったりですとか、バラ園でやっているのは、北海道をバラを観に行くというかたちで、北海道で見られる、公共も民間も含めた、バラ園、ローズガーデンと言う名のつく施設があるところにそれぞれ協力を仰いで写真や文章をいただいて、あまり大きくないのですがパネルを作って、バラ園に来ていただいた方に他にもこんなバラの施設があるというのを紹介したりしています。

234号から岩見沢にかけてですと、空港の近くですとイコロの森、えこりん村、ノーザンホースパーク、ニドムも最近オープンガーデンを始めて、ガーデンウェディングに力を入れているので。あとはユニガーデン。うちのバラ園を通して旭川に向かっていくという形もあるかと思います。あとは札幌の方につながっていくのであればバラ関係の白い恋人パークを含めて、いくつかあるので、今のガーデン街道も200キロというすごい距離を結んでいて、旭川から富良野までの間は何もないので、それを考えると距離的には変わらない感じの離れ方で点在はしているんで、そういうところも入れていけば、いろいろできるのではないかと思います。

谷川：

今お話を聞いたらすごい素材があるから、ガーデン街道とシーニックバイウェイで美しい北海道をつくるという「100年の木プロジェクト」というものを3年前からやっているのですが、行政も市町村も全部入っています。さっきシンクタンクのお話が出ましたが、うちも、「100年の木プロジェクト」の物語を最初に作ったんです。100年後、こういうものが望ましいよね、と。できるかできないか。自分たちはもういないわけですが、孫のそのまた先の

世代ですから。そういう物語があると具体的に進みやすい。ウィンターサーカスも、最初は千歳空港を降りて、輪厚パーキングエリア、岩見沢パーキングエリア、奈井江パーキングエリア。それから西神楽、東神楽、富良野、トマム、というとんでもない距離ですが、距離感はありません、1つの物語がつながる仕組みができると、即、入場者が増えます。ガーデン街道の会議にオブザーバーとして参加すればよい。ガーデン街道のパンフレットに岩見沢のバラ園も入れてよ、たとえば、簡単に受け入れてくれますよ。拒否は絶対にしないで。こちらの物語を作る方がみんな参加しやすくなります。思いが集結するから。最初はおもてが、あのガーデン街道の7つの人たちと。シーニックバイウェイの4ルートですから、もうぐちゃぐちゃ、最初におもて。でも物語が出来上がるとみんな一致できて、地元の帯広の企業もどんどん支援してもらった。今の、物語が大きなヒントだなあ、と思います。秋にまた総会がありますので、来てください。

石渡：

ありがとうございます。

小林：

最後にぜひ一言、もう一人ぐらい。よろしいですか。短い時間で申し訳ありませんが、最後に、山口官房審議官から。

## 6. 閉会

山口：

いろいろ話していただいたので、一言だけ。先ほど、ガーデン街道の話があったが、ちょっと横にそれるかもしれませんが、所沢の西武ドームで「国際バラとガーデニングショウ」というイベントが行われています。そこに行った人の話を聞くと、特別展示で、「風のガーデン」の展示をしているのですが、そこでガーデン街道のツアーのパンフレットを配っているんですね。東京でどんどんPRして東京からお客さんを呼ぶという取り組みをしている。先ほど言ったように、物語を作ってパンフレットを作ると、東京のお客さんがパンフレットを見て、来てくれるのでそういう取り組みもあるかと思います。スポーツの話もおうかがいしましたが、総合的にいろいろ考えたときに、ヒントになる。総合的に取り組むときに、しっかり地域に根差して取り組んでいるというところで、大変参考になりました。希望的観測ですが、都会から農村回帰の時代が来るのでは、と個人的に思っています。都会から、農村の、大地の懐の深い優しさに触れたいという方が来た時、そのための受け皿を作ることが必要かと。そのためには、仕事の話や住宅の話、コミュニティに入りやすい雰囲気を作るなど、NPO的な新たな故郷の力も借りながら取り組んでいくことが必要かと思います。今日、お聞きして、非常に示唆に富んだお話をお聞きしましたが、基本的には、地域にしっかり根差

し地域の課題を見つめ、自分の問題だというふうに取り組んでいて、積極的に活動をされている。今日お集まりの皆さんのような人材をこれから一人でも多く育てていくということが、北海道の発展のために必要だと改めて痛感させていただきました。今日うかがったお話につきましては冒頭申し上げました通り、新たな計画作りの検討の際に参考にさせていただきたいと思います。今後ともご支援、ご指導よろしく願いいたします。本日は長い間、ありがとうございました。

小林：

以上をもちまして、「北海道価値創造パートナーシップ会議 in 岩見沢~新たな北海道総合開発計画に向けて~」を閉会いたします。本日はご多忙のところご参加いただきまして、本当にありがとうございました。

以上